

女の顔

下

平岩弓枝

女の顔

下

平岩弓枝

文藝春秋

女の顔下

昭和四十五年十二月十五日 第一刷
昭和四十六年九月三十日 第九刷

定価 五六〇円

著者 平岩弓枝

発行者 檜原雅春

発行所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三
電話東京二六五局一二一一

郵便番号一〇二

印刷 大日本印刷
製本 天嶋製本

万一差丁乱丁の場合はおとりかえ致します

© 1970 Yumie Hiraiwa

Printed in Japan

0093-360620-7384

目次

雨……………5

断絶……………35

鬼の居ぬ間……………66

失態……………104

喪服……………136

冷夏……………169

向日葵……………201

あとかき	411
夜の空に	389
日本	364
別れのために	345
心の中の鬼	321
揺れる	291
日々平安	262
晩夏	233

女
の
顔
下

題字	裝幀
中田	栗屋
功	充

雨

葉桜の下で、英行は暫く、なすこともなくたたずんでいた。

息子が、やはり君枝の存在を知っていたのかと、齒ぎしりする思いであった。

財布の中身は、ざっと三十万ばかりであった。君枝に渡す十万の他に、英行は常時十万以上の金を財布に入れている。

金を奪われたことよりも、息子が、一人の男性として自分の前に立ったことが、怖ろしいようであった。

今の若者はなにを考えているかわからないというが、英行の場合は、息子と父親の心の通い合いが、とうの昔に断絶していた。

そのことを、英行だけがわかっていなかったようである。

家へ帰ることを英行は考えた。

行方知れずの息子に逢えたのである。金を奪って去ったことも、妻に話すのが普通であった。

家を出て来た時の気まずさも、息子という共通の話題によって吹きとばすことが出来る。

第一、一文なしでは君枝のマンションにも行きにくかった。

原宿の近くまで行っていたから、家へ戻るのに二十分近くかかって、玄関を入ると、若いお手伝いが蒼い顔で突っ立っている。

英行の顔を見て、

「お帰りなさいませ」

形だけのお辞儀をして、あわてたように奥へひっこんでしまった。

その声をききつけたのか、居間から安芸子が走り出て来た。

「あなた、宏が……」

とり乱した声で、いきなり叫ぶ。

「なに……」

「宏が帰って来たんです。たった今……」

「なんだと……」

すると、原宿で別れて、そのままタクシーを我が家へ乗りつけて来たのか。

「なにをいったんだ。あいつ」

咄嗟に、そのことが胸をかすめた。金を持って行きながら、君枝のことを妻にばらしたのかと思う。

「なにも、いいやしませんのよ。ただ、強盗みたいに、お金を出せって……」

「金を……」

「ええ」

安芸子は涙を流した。

「それで……やったのか」

「あの子、ナイフで、あたしをおどしたんですよ」

「ナイフで……」

産みの母が、息子からナイフでおどされるなどという馬鹿げたことが、実際にこの家の中で行われたというのである。

「宏……あなた、お母さまに向って、なにをするんです……」

安芸子のあえぎを、息子は無表情でみつめていた。

「いそぐんだよ。五十万でいい……」

「そんなお金、あるものですか」

声をききつけて、二階から宏の祖母が下りて来た。

「まあ、宏……」

へたへたと腰くだけになって、居間の入口へすわり込んでしまった。

宏は祖母に見むきもせず、母の胸へナイフを近づけた。

「早くしろよ。野良犬は気が短いんだ」

どこで、そんな台詞をおぼえて来たのかと仰天するばかりであった。

慄えながら、安芸子はハンドバッグをあけて、財布を出した。

息子は片手で財布をあけてみた。十七、八万円入っているそれを尻のポケットに突っ込んだ。若いお手伝いは、玄關で棒立ちになっていた。

祖母も母も、出て行く若者を茫然とみつめているだけであつた。

息子と一足違いに、英行が帰宅した。

「あなた、追つて下さい。宏を連れ戻して……」

思い出したように、安芸子がうろたえた。

「早く、あなた……」

止むなく英行は外へ出た。

宏がまだ近くにうろろしていることは考えられなかった。

表通りは、タクシーの空車がいくらかも走っているし、ひよつとしたら、さっきのタクシーを待たせておいたかも知れなかった。

それでも、英行は恰好だけは家の周囲をまわつてみた。

むしろ、息子に出逢わないことを心中に願つた。

うっかり、逢つても家へ連れて帰ることは出来なかった。息子の口から、君枝の件が暴露される怖れがある。

待てよ、と足を止めた。

息子に原宿の近くで逢い、金を奪われたことを話すつもりで帰つて来たのだが、こうなったら、

いわないほうが無難だと気がついた。

話せば、どうして原宿の近くなぞを歩いていたのか説明しなければならない。財布に三十万も金を入れていたことも、妻の耳には入れたくなかった。

宏が自宅に現われて、金を持って出て行ったのなら、もはや、原宿での一件は黙っていても差し支えなかった。

そのことに気がついてよかったと思った。うっかり、興奮にまかせて喋ってしまったら、とんだ墓穴を掘るところである。

帰って来ると、二階で人の声がしていた。

安芸子がかげ下りて来て、

「あなた、お母さまが……」

持病の心臓の発作が起きたという。英行は医者顔で二階へ上った。

階下では、安芸子がどこかへ電話をしている。

常備の薬を注射するだけで、病人はすぐに落ちついた。精神的に弱い女であった。孫の一大事だと、必死になるというものはない。

注射器を片づけて、枕許で様子をみていると、階段を上ってくる音がした。

安芸子が先に立って、岳雄が続いて入って来た。

英行は、ちょっと嫌な気がした。

義母の発作は大したことではなかった。わざわざ、岳雄が来るほどのものではない。医師とし

て英行がついているのだ。

立ち上って、英行は容態と処方の説明した。岳雄は黙ってきき、

「御苦労だった。君は階下へ下りていてくれ」という。

命令に従ったものの、英行は不快だった。

妻も、妻の父も英行を無視している。

若いお手伝いにコーヒを淹れさせて、英行は居間で、たて続けに煙草を吸った。

やがて、岳雄と安芸子が下りて来た。

「宏が帰って来たそうだな」

安芸子と英行を等分にみて、訊いた。

「金を持って行ったそうだが、なぜ、とめなかった」

とがめる口調に、安芸子が反撥した。

「無理ですわ。とめるひまもなにもありませんのよ。あの子、ナイフを持っていたんです」

「我が子に刺されるとでも思ったのか」

「でも……」

「宏が、お前を刺すと思ったのか」

腹立たしげな声であった。

「安芸子、お前、それでも母親か。ナイフが怖ろしくて、我が子を制することも出来なかったのか」

安芸子も英行も、口を突かれたように黙った。

「英行君は、なにをしていたのだ」

詰問の鋒先を向けられて、英行はへどもどした。

「外出していたものですか……」

「外出……？」

「はあ……その……ちと考えごとがあつたので……」

「あなたがいけないんですわ。あなただって方は、いつでも肝腎の時にいないんですもの」

ヒステリックに安芸子が叫んだ。

「大体、あなただって方は、子供の教育にまるで無責任なんです。宏がこんなことになったのも、

あなたが……」

「お前は、宏に対して無責任でなかったといえるのか」

「お父様、ひどいわ。そんなおっしゃり方をなさるなんて……」

放り出したままのハンドバッグからレースのハンカチーフを取り出して、眼許にあてた。

「私だって、するだけのことはしていますわ。PTAだって、授業参観だって欠かさず行っ

すわ」

「PTAや授業参観へ出て行くのが、母親の責任なのか」

「でも……私だって、お母様からそれ以上のことをしてもらって居りませんわ」

安芸子はひらき直っていい、岳雄はそんな娘から視線を逸らした。

「そうだ。安芸子のいう通りだ。お前をそういう母親に育てたのは、わたし達の罪だ」

どうしようもない空気が、居間に充滿した。

「ともあれ、宏を探すのが先決ですよ。わたしも、病院の仕事に追われ、子供達と話し合いの暇もなかったのがまずかったと後悔しています。なんとかして、宏の行方を突きとめて……」

父娘の仲をとりもつようなつもりで、英行が話をはさんだ。

「宏を探して、連れ戻す手だてがあるというのか」

岳雄の表情が再び、けわしくなった。

「小犬が迷子になったのではないのだ。一人の人間が親たちに反撥して出て行つたのだ。どうやって探し出し、どうやって連れ戻す。まさか、座敷牢を作つてとじこめておくわけにも行くまい」

「しかし、このまま、放っておいては……」

「放っておくより仕方がないだろう。今までだって放っておいたのだ。あとは、宏が又、いつか、金を取りに、この家へやってくるかも知れない。その時に、我々がどうすべきかということだな」

窓の外が急に暗くなっていた。

注意してみると、絹糸のような雨が芝生を濡らしはじめている。

涙の乾いた顔で、そっぽをむいている安芸子と、ただ、煙草をふかしているだけの英行を眼のすみにみて、岳雄は去っていった孫を想った。

こんな両親と知っていて、なぜ、もう少し早くに自分が宏の心に近づいてやれなかったかと後悔が深かった。

娘夫婦を責めながら、岳雄は自分を責めていた。父親として、するべきことはなにもしていなかったのではないかという思いが岳雄を捕えていた。

暗い沈黙の中に電話が響いた。お手伝いが出て、安芸子を呼んだ。

「お嬢さまからでございます。あの、お友達と銀座へお寄りになるので、お帰りは遅くなるそうですけれど……」

安芸子が立って行った。すぐに戻って来た。

「あの子ったら、勝手に電話を切ってしまつて……」

雨の音をききながら、春奈は久しぶりに客の座敷へ出ていた。

「おかみさん、ちょっと……」

新しい料理を女中と一緒に運んで来て、ついでのように君子が呼んだ。さりげなく立って、廊下に出ると、すぐ続いて出て来た君子が、

「お電話ですよ」

「電話って、誰方……」

「わざわざ、おかみさんと呼ばひ出さなけりやならない電話なんて……ぴんと来ませんかね」

「まさか、慎一郎じゃないだろう」

「近い線ですけど」

廊下をいそいで、帳場へ出た。

黒い受話器を取り上げた時には、大体、相手の見当もついていて、

「もしもし、お春でございますけども……」

「ああ、いそがしい所を呼び出してすまなかった……」

岳雄の声がいつもより若い感じであった。

「どうなすったんです。突然に……」

「話があるんだ。ちょっと逢いたいんだが」

「今更、くどいても駄目ですよ」

傍に居るのは、なにもかも知っている君子だけだから、春奈も気がねなく、あけすけな言い方をする。無論、君子の手前、照れているから、わざと連っぱな言葉つきになるのだ。

「都合はどうかな」

「家へおみえになるんでしたら、いつでも結構ですよ」

「お春の家でないほうがいい」

「あら、どうしてですか」

「そこじゃ話にくいんだよ」

「怖いですね」

「外へは出られないか」